

講義
8復興とともに生きる
子ども・若者への支援

支援活動の変遷

TEDICというNPOは、東日本大震災後に、当時私が通っていた大学院の同級生たちと学生団体として立ち上げました。最初に始めたのは避難所での学習支援で、いわゆる緊急期の支援になります。震災後は学校が避難所になってしまっているのです。1カ月ぐらい学校が開かないという状況でした。そもそも学校が開いていないという時期に、子どもたちもどうしたらいいのか分からない状態だったので、避難所で一緒に勉強するというのが最初の活動です。

その後、8月ぐらいに避難所自体が徐々に閉鎖をしていって、仮設住宅に移っていきます。学習支援も、最初は学校が始まるまでの予定でしたが、いざ学校が始まると、避難所運営のために学校が開けなかった期間に進めるべきだった授業内容も含めて、1.2倍や1.3倍速で授業を進めます。そうすると、もともとぎりぎりまで授業についていっていた子どもはどんどんドロップアウトしていくので、その子どもたちのためにも活動自体は継続していました。このときに関わっていた子どもたちが仮設住宅へ入居することになったので、次は仮設住宅での学習支援という形で活動を広げていきました。

活動3年目ぐらいになると、仮設住宅に住む被災した子どもへの学習支援依頼の話ももらいました。よくよく話を聞くと、確かに被災して、皆仮設住宅に入居しているけれど、そもそも震災前から学校で窓ガラスを割るなど、荒れが目立つ状態で。震災以前から、様々な事情の中で暮らす子どもたちに関わることがすごく増えていきました。

この頃から私たちもあることを感じ出します。震災があって、もちろん皆が被災していきます。その中でも、自分たちの力で、あるいは自分のうちの家庭の力で、あるいは親戚など、いろいろな人を頼りながら生活を取り戻していける子どもと、一方で実はもう震災の前から様々な困難を抱えながら生きていて、本当にぎりぎりの中で生活をしていて、元の生活に戻ろうにも戻れない、頼る所はないという子どもとに分かれていること。また今後僕たちが活

動していく中で出会っていく、色んなしんどさを抱えた子どもたちというのは、後者のほうだろうということですね。

そうすると、仮設住宅だけでなく、みなし仮設に住んでいる子どもも含め皆が来られる場所が必要ということで、公民館を借りての学習支援を始めました。この学習支援は夕方から夜に開催していましたが、今度は学校に行っていない子どもに出会うことになります。彼らは昼間に何をしているかといと、家で寝ている、あるいは家でずっとゲームをしているというので、それなら日中の居場所をつくらうと、フリースクールを始めました。この活動は、大阪のNPOから運営を引き継ぐ形で始めました。そのような場所を開いていると、また学校から連絡をもらって、「フリースクールに、不登校の子どもを受け入れてほしい」と言われます。ですが、話を聞いていると、そもそもこの子は家から出られない、2年間引きこもっていますなど、来所を前提としたフリースクールでは、受け入れることが困難でした。それならば、僕たちが訪問型でそのような子どもたちに関わっていく活動を始めてみようかと、訪問型の活動を始めていきます。このように活動が変わっています。

緊急期に避難所で始めた活動が、継続しているうちに、緊急期から復旧期、復興期と地域の変化に伴い活動の形を変えていながら、結果的に今僕たちが関わっているのは、彼ら自身が直接震災の被害を受けているかどうかは関係なく、もともと、あるいは現時点でいろいろなものを抱えながら生きている子どもたちなのです。

石巻が抱える課題

ここからは地域の課題について話をしていきたいです。今私たちが関わっている子どもたちのキーワードは、不登校、たばこ、リストカット、万引、インターネットトラブル、ふけや体臭、深夜徘徊、多動傾向など多岐にわたります。今、発達障害という言葉が出てきており、それは先天性な側面も持ちますが、実は養育環境によっては同じような行動

講師

もんま ゆう
門馬 優氏NPO法人TEDIC
代表理事

1989年宮城県石巻市出身。早稲田大学大学院教職研究科修了。東日本大震災で故郷が被災、2011年にTEDIC設立。現在、石巻市教育委員会学校支援地域コーディネーター、子どもの貧困対策センター公益財団法人あすのばアドバイザーなどを務める。

まとめ

子ども・若者への支援では、緊急期・復旧期の支援から復興期の支援への移行に伴い、もともとの地域課題に向き合っていく必要があります。子どもが抱えている様々な困り事の背景には、複合的な問題が絡み合っています。困りごとの元となっているものの状況を改善するために、そして支援団体の皆さんが全てを抱え込んで疲弊してしまうのを避けるためにも、関係機関と連携し、地域全体で取り組むことが大事です。子どもは親が見るものではなく、地域全体で支えようということです。様々な人を巻き込んで、地域のまなざしが変わることが、何よりの成果であり、子どもにとって一番の支援になると思います。

や姿が見られる子どももいます。なかなか親御さんが、子どもと関わる時間を取れなかったり、子どもに関わっているうちに愛情が憎しみに変わってしまったり、親からの愛情を受けられずに、愛着を形成できずにいる子たちがいます。その子たちが学齢期に移行する中で、たとえば先生が面倒くさいとなっていて構わなくなると、どんどんその行動が激しくなり、いたずらや悪さをして構ってもらおうとします。多動傾向とはクラスの中でそのようなことをしている子どもたちも含まれています。

また、石巻市では就学援助などを受けている世帯が震災後にガクンと跳ね上がり、現状では石巻の約4割の子どもが何かしらの援助を受けて学校に通っています。これは、経済的理由により就学が困難な家庭に対して学用品等の必要な経費の一部を援助する「就学援助」の利用者に加え、東日本大震災の被災者向けに、就学援助とは別の基準で援助を行う「被災児童生徒就学援助」の利用者も含めての数字になっているので、純粋な経済的なものだけではないですが、事実として今このような状況にあります。被災児童生徒就学援助は単年度予算になっているので、今後どうなるかも、切れた後にどうなるかも分からないです。

あとは不登校です。石巻での不登校出現率は、震災後に上がって、下がって、また上がるという推移をしています。これはタイミングとして避難所から仮設住宅に移る時期、仮設住宅から復興公営住宅に移る時期とも関連しています。ここ1、2年に限って見てみると、上昇傾向にあります。今年度は小・中学校で250人の不登校の子どもたちがいますが、これは不登校という形で、われわれに何か今大変なことが起きていると伝えられている子どもたちがいるということなのです。

子どもたちを支える二つの支援活動

そのような状況の中で、今私たちは「トワイライトスペース事業」と「ほっとスペース事業」という二つの取り組みをしています。「トワイライトスペース」は、夜の居場所で、当初から続けてきた学習支援が

形を変えてきて今この形に落ち着いています。石巻市内3カ所に居場所を開いて、夜の時間、一緒にご飯を食べたり、宿題をしたり、トランプをしたりということをしています。コンセプトとしては、家庭を届けるということです。移動が大変な子どもには法人で送迎をしたり、場合によっては訪問をしたりします。

「ほっとスペース」はフリースクールで、不登校状態にある子どもたちが通ってきますが、本当に状況は様々です。午前中は一緒に勉強して、昼は弁当を食べて、午後は皆で話し合っただけで自由に活動を決めています。夏は釣りに行って、冬はスケートに行って、児童館が近くにあるので、そこでギターを弾いたりして過ごしています。こちらの場合によっては訪問するというのもしています。学校によっては、文科省通知に則り、今は在籍校の出席扱いとなるようになっています。

子どもの背景は非常に複雑です。僕たちは子どもをいろいろな形で受け入れていますので、児童相談所やスクールソーシャルワーカー、学校に加え、最近では病院から直接つながったり、地域の民生委員からつながったりしています。僕たちは必死に子どもと関わりますが、子どもたちの声を聞いていくと、当然彼らの家庭の状況が状況ですから、いろいろなことが聞こえてきます。その一つ一つのつぶやきを聞いて、できる場所については関係機関と協力しながら家庭の支援をしています。例えば、子どもから母親が1週間後に仕事がなくなってしまうというつぶやきを聞いて、ハローワークにつないで次の就職先を見つけることができたり、フードバンクに声掛けをしてすぐに食料を届けることができたりと、いろいろなケースがあります。子どもたちと関わり続けていく上で、彼らを取り巻く背景が見えてくると思いますが、その際に、自分たちを守る意味でも、是非いろいろな関係機関をしっかりと知っておいて、つながるべき所とつながっておいて、役割分担をして支援を行っていただきたいです。

地域とつながる地域食堂

私たちは今必死に、いろいろな所で出火した火事

をひたすら消しに行く、という消防士のようなことをしています。ですが、ここまで課題が顕著に明らかになる中で、私たちの所につながるもっと手前で、近所のつながり、あるいは地域のつながりで支えることができないか、もっと早く誰か気づかなかったのかと思う機会が増えました。そんな思いで、仕掛けている取り組みを紹介します。

全国的に取り上げられている「こども食堂」の取り組みですが、私たちが行っているのは、地域のかたがたと子どもたちの縁の結び直し、紡ぎ直しです。月に1回、一つの小学校区に絞って、地域住民と子どもたちが一緒にご飯を食べるといふご飯会です。もともと、地域の方々が子どもたちのために何かしたい、何かあったときに力になりたいと思っている状況がこの地域にはありました。その一方で、今の世の中は、子どもに声を掛けづらい状況にあります。住民はそこにずっと住んでいるのですが、おはようと声を掛けようものなら、防犯ブザーを鳴らされるのではと、住民達はとても警戒して、声を掛けにくいという状況です。ですが、子どもたちからすると、初めての人で、そもそもあなたは誰？というわけです。そこで子どもたちといろいろと話を重ねる中で、まずは地域の方々と子どもたちの出会い直しをしよう、とこの活動をしています。

1回に60人ぐらい子どもたちが来ます。もう皆知り合いです。近所のおばちゃんたちも15人から20人ぐらい来てくれています。主に民生委員や児童委員の方がいますが、そのような方々を巻き込むために社会福祉協議会に声を掛けて、コーディネーターの方に力になってもらっている状況です。調理のほとんどは、地域住民の皆さんが子どもたちと一緒にしてくれており、また地域の中には野菜を提供したいおじいちゃんがいるので、持ってきてもらい、お米は農家から余ったものを提供してもらいと、ほとんどお金がかからない状況で行っています。場所も町内会館を借りて、町内会のお金で運営するという形で継続しています。

親御さんが送り迎えできる子たちはいいですが、そうでない子どもたちをどうするか、むしろそのような子どもたちにこそ夜の場を届けたいという思

いもあります。住民たちを巻き込んで、かつ小学校区でやると徒歩で送迎もできます。一部、仮設などから来ている場合もありますが、そこも親御さんとその住民との関係の中で、車で送ってもらっています。また、最近、そこから発展した取り組みが、意図せず生まれています。子どもたちを送っていくと、家がまだ真っ暗で、親が帰ってきていないことに住民が気づきます。それならうちと一緒に風呂でも入って、テレビを見てという事例が始まっています。住民と子どもと、あるいはその親御さんとの関係の中で送ってもらっていることですが、そのような取り組みも生まれているのです。

地域の力になりたいこどもたち

これまで支援をされる側として子どもの話をしてきましたが、支援が必要な子も実は力になりたい、何かしたいと思ったりしています。そこでいくつか具体例を紹介します。

いしのまきカフェ「」（かぎかつこ）は、高校生の目線で石巻の良さを発信しようと、NPOの支援を受けながら、高校生が石巻市役所の1階で週末にカフェを開いています。また、何か力になりたいけれど何をしたらいいのかわからないという高校生たちを集めて、一般社団法人ISHINOMAKI 2.0という団体が私塾のような場所を開いて、そこから高校生のプロジェクトが生まれています。こういった動きが石巻の中で出てきたので、そのような子どもたちや彼らを支援している大人や街の人を集めて、月に1回、プロジェクトの話を皆で聞いて形にしていくという、石巻プロジェクト『まきプロ』という活動も始まっています。

子どもたちは、ただの弱い存在ではありません。私たちより実はよほど強かったりもして、子どもたちのほうがともしなやかだったりもします。ですので、純粋に支援をする対象としてではなく、むしろ一緒に復興していく仲間として見て、一つの支援のプログラムの中でも、子どもたちが自分の力を発揮できるような場を設定したり、子どもの声を聞いたりしていくとより良い活動になると思います。